

聞一多論文「『詩經』的性欲觀」について

—— その淵源を尋ねて ——

鈴木 義 昭

キーワード

「『詩經』的性欲觀」 清華学校の映画騒動 清華学校の男女共学問題
潘光旦と聞一多 五四以来の『詩經』解釈

はじめに

聞一多「『詩經』的性欲觀」は、1927年7月9、11、12、14、16、19、21日の7回に亘って「時事新報」「学灯」に発表された。この論文の題名を見た読者は、恐らく驚愕を禁じ得なかったことであろう。当時の中国にあって、性そのものを扱うことは、それほど多くはなかったものと考えられるからである。詩人として油の乗り切った時期を迎えた、二十九歳の青年が敢えてこの論文を書いた動機は何であろうか。また、その背景にあったものは何であったのか。本稿では、聞一多の『詩經』研究そのものに立ち入るのではなく（このことは他日を期することとして）、それが書かれるまでの聞一多の遍歴を辿り、併せて、中国と欧米を意識に置いていた知識人たちの動向も眺めることにしたい。

(1)

聞黎明・侯菊坤編『聞一多年譜長編』は

这是先生最早运用文化人类学方法撰写的学术论文，力图还原『诗经』的本来面目。其中主要观点与传统的经学家大不相同，所以当时并未引起人们重视，…。但足先生研究古代文化，其认识与本文有相当联系。

と記す⁽¹⁾。この作品が後の中国古典研究への道筋、すなわち『詩經』から唐詩等に到る道筋と相当の関連があるとの指摘は、聞・侯同書の見方の通りであろう。呉万鍾「试谈闻一多先生『诗经的性欲观』的思维背景」も同様の立場を取

る⁽²⁾。また、当時としては余りにも斬新な手法であったため、却って人々の注目を集めなかったことも事実であろう。ただ、聞一多の取った方法が厳密な意味での文化人類学的手法であったかどうか、さらにまた、彼自身明確な文化人類学的方法意識を持って書いたかどうかについては、再考の余地のあるところである。

事の発端は、1921年6月に遡る。聞一多は、1921年5月28日の評論、「評本學年『週刊』里的新詩」（6月発行の「清華週刊」第七次増刊）中で、10篇の現代詩を取り上げる。呉景超の詩「出俱樂部會場的悲哀」について、

這首詩底背景里埋藏着一个重要的社會問題，很有研究底價值。性慾同殺慾這兩個衝動雖已被文化征服，但其遺恨未斷，常時于無意中發泄出來。他們發泄底特侯能喚起一種特別的快感，這是天性受勉強的壓制底反動底結果。と言つて、「重要な社会問題」の底辺には「性欲と殺人欲の衝動」が隠されていると指摘した⁽³⁾。当時の「社会問題」について、詳しくは後ろで述べることにするが、呉景超の当該詩に付された「附識」（1921年6月3日付け「清華週刊」第222期所収）においても、

景超以我們的俱樂部中底種種遊戲，總不外性慾殺慾兩個半被文化征服的原始衝動底發泄。這種衝動是破壞文化的，所以我們不應給他們發泄機會。可是現在校中使用這種遊戲底風氣很盛，少數能置身于物質世界之上的人還不致受他的影響，但多數的“弄潮兒”恐怕難免慘遭不測，葬身魚腹之險。我讀這首詩，想叫那充滿性慾殺慾底表現的電影片，全校的人把他當飯吃，我便“不寒而栗”啊！不知景超曾否爲他們祈禱過：…

と言ふ⁽⁴⁾。

こうした論評は、新詩に関するものであったことは言うまでもないが、その頃、清華学校内の俱樂部で週末に上映されていたエログロ映画に対する反発の現れでもあったし、清華学校における男女共学問題に対する彼及びその同人たちの意見の表白でもあった。それは、ひいては、清華学校はいかにあるべきかという問題とも深く結びついていたように思われる。また、その背後には、五四以後の社会的傾向として、広くは第一次世界大戦後の世界的な傾向として、性を直視しようとする動きがあったことも見逃せないであろう。

(2)

1920年3月中旬、聞一多、潘光旦（「旦」字は、後に「旦」字に改められる）、吳沢霖、聞亦伝（聞一多の従兄弟）の四人によって、小さな団体が結成される。後に、劉聰強と孔繁祁とが加わり、計六名になったため、向上を表す「上」と「六」を表す篆字の「上」字が団体名に選ばれたのだと言う⁽⁵⁾。彼らがどのような活動を行ったかと言えば、20年3月から6月までの間に、10回の「常会」を持った。その具体的な分野は以下のとおりである。

我們開過十次常會，計有讀書報告十六編，問題討論六編。它們分起，是：

讀書錄：歷史 2；娼妓 2；美學 3；經濟 2；文學 5；哲學 1；農業 1。問題討論；稱謂姓氏 2；校內問題 2；服飾 1；中國目錄法 1。

と⁽⁶⁾。この会では、娼妓の問題は討論されているが、映画については触れられていない。その理由、以下縷々述べることにより、明らかになるであろう。

中国における映画の歴史を簡単に辿っておこう。

映画が北京で初めて上映されたのは、1902年のことであった。1904年には、西太后が映画を見ていた時、映写機が爆発するという事故が起きる。1906年にも弁士が爆発に巻き込まれて死亡する事故があった。それにも関わらず、映画は大衆の娯楽として地位を不動のものとしていく。第一次世界大戦後には、アメリカの映画フィルムが輸入され、チャップリン、バスター・キートン等の喜劇映画が好評を博した。しかし、輸入されたフィルムの多くは、アメリカの俗悪な探偵物等であった。1920年には、上海でアメリカ映画に刺激された男が女性を殺すという凶悪事件が引き起こされた。映画会社は映画会社で、それを題材にして映画を作るといような悪循環が繰り返され、当然のこととして、大きな社会問題となっていたのである⁽⁷⁾。

折りも折り、1920年10月23日に、上社本学年度第四次常会が開かれることになった。この会では、懸案事項として、「清華底電影」・「中國底電影」・「歐美底電影」・「教育中之電影」・「藝術之電影」・「電影與道德及電影之審查」・「電影與衛生」・「科學中之電影」・「宣傳事業底電影」・「實業中之電影」・「電影底歷史」・「電影在清華底勢力」・「改良清華電影底計劃」の諸項目が挙げられ、各人が二項目ずつ担当することになった⁽⁸⁾。この項目を眺めてみると、清華学校の映画上映会に始まり、映画自体の問題、映画の社会的影響に至る、各種の問題

点がコンパクトに提起されていると言えよう。

しかし、上社の活動は、この会を最後として停止される。その原因としては、サークルの範囲内で論じられていた映画問題が学内の規模に拡大されていったため、校長を始めとする学校側との交渉なども加わり、他の問題を研究し合う時間的余裕がなくなったこと、聞一多が作ったもう一つのサークル、「美司斯」（ミューズ）が成立した⁽⁹⁾ため（1920年11月）、両方のサークルに全力投球ができなくなったことも挙げられるであろう。

上社の解散はあったものの、映画に関する各人の勉強の成果が続々と発表される。聞一多は、「黄紙條告」（「清華週刊」第198期、11月12日）、「電影是不是藝術？」（同第203期、12月10日）を発表する。論文「黄紙條告」では、黄色の紙に書かれた映画の宣伝文句、すなわち「黄紙條告」と、それによって会場に集まってきた人々を揶揄するのである。それは、例えば、

好片子？怎麼好法？《黑衣盜》、《毒手盛》、好盜，可敬可愛的盜賊，“飛驒走肉”，殺人如同打鳥！

のような言い方になる⁽¹⁰⁾。後の論文「電影是不是藝術？」では、揶揄はなくなり、もっと真摯な迫り方をする。映画を三種に分けて、(1)「機械の基礎」では、映画が機械の奴隷であることを挙げる。(2)「營業の目的」では、利益ばかりを追求する余り、理想がない点を責める。(3)「非芸術の組織」では、無声映画の写実性の勝った点、過度の客観性、過度の長さ、過度の速度、（芸術が持つべき）靈魂に欠ける点、そもそも映画に音声のない点等を挙げる⁽¹¹⁾のである。しかし、こうした欠点は、今日の我々の目から見れば、ほとんどが解消したかに見えるが、映画の勃興期である1920年当時にあってはやむを得ないものであったかも知れない。

聞一多「黄紙條告」から「電影是不是藝術」までの間に、劉聰強「電影之由來」、孔繁祁「電影事業」、聞亦伝「世界各國電影底情形」（以上、同201期）、潘光旦「電影與道德」、「電影與視覺」、吳派霖「電影與教育」、孔繁祁「電影與宣傳」、劉聰強「清華電影之過去與現在」（以上、同202期）、潘光旦「清華電影和今後的娛樂」（同203期）が発表されている⁽¹²⁾。

こうした諸論文の総括的意味も込めて、聞一多は次のように結論づける。

電影底本質不是藝術，但有“藝術化”底權利，因為世界上一切的東西都應

該“藝術化”，電影何獨不該有這權利呢？至干電影現在已經稍稍受了點藝術化這個事到是我們不應一筆抹殺的。不過因爲他剛受下一點藝術化，就要越俎代庖，擅離教育的職守而執行娛樂的司務，那是我們萬萬不准的。

と⁽¹³⁾。現在の映画は芸術とは言えないが、芸術になれる可能性を持っている。そうした可能性を抹殺してはならないのであって、芸術化するためには、娯楽に墮することなく、教育の面を離れてはならない、と。要するに、上社のグループ構成員たちは、清華学校の学生としての在り方を映画問題を通じて、語りかけたと言うべきであろう。

(3)

上社の第四次常会の時、「中國古代娼妓史」が課題として課せられて以後、4月19日に同社の第六次常会が開かれ、「中國古代娼妓史」、「梅特林克（＝メーテルリンク）底戲劇」、「歐戰（＝第一次世界大戰）原因」についての報告があった。また、「如何補救清華學生底細行」を巡って討論が行われた。これこそ、清華学校の学生としての在り方を論じたものである。これ以降、「上社」は活動を停止したため、女性問題について報告が行われたり、討論が行われたりすることはなかった⁽¹⁴⁾。

それが再燃するのは、1921年6月8日のことである。清華金校長が「清華週刊」「第七次増刊」に載せることになっていた論文三本の掲載を拒否した。すなわち、「清華男女同校運動之新趨勢」、「齋務長問題」、「清華兵操的末日」の三本である⁽¹⁵⁾。義和団事件の賠償金により創設された清華学校は教育部主管ではなくて、外交部主管であったこともあり、外交部の官僚が校長に就任することが多く、教育の面ではズブの素人であった。そのため、映画問題の時もそうであったが、必ずしも適切な処置を執ったとは言い難い部分があった。男女共学問題、学生寮寮長問題、軍事教練問題のどれをとっても外交部とは直接の関係を持っておらず、校長が拒否反応を起こしてもやむを得ない点もあった⁽¹⁶⁾。それに、もう一つの要素が加わっている。後でも触れるように、1919年、周作人は、「中國小説里的男女問題」を書いて以来、男女に関わる広範な問題提起を行っている。1921年1月1日、「新青年」（第八巻第5号）では、「野蠻民族的禮法」と題して、当時の浙江省議会が省立第一師範の男女共学計

画を審議したことを真っ向から批判している⁽¹⁷⁾。高等教育機関における男女共学運動は中国全土で一種の潮流となっていたのである。そうしたことに敏感になっていた校長が当事者になることを恐れていたものであろう。

この年の10月31日、清華学校に「清華男女同校期成委員会」が成立する。聞・侯『聞一多年譜長編』は、

清華学校曾干五四運動後起議過男女同校問題，是年暑假後復有力倡者。と記す⁽¹⁸⁾。この文では、「力めて倡した者」が誰であるかはっきりしないが、後に述べるように、私は潘光旦ではなかったかと考えている。構成員については、

午後五時在高等科二五號開第一次會，通過《簡章》，……

（決定會員）通常與責任兩種，通常會員現已有百人、責任會員亦有六十餘人。

同日舉出時昭掄，羅隆基爲總務委員，潘光旦、聞一多爲文書委員、劉昭禹、蔡公椿爲會計委員、陳石孚、翟桓爲出版委員。該委員會復舉陳石孚爲主席、時昭掄爲副主席。

とあり、注目すべき点としては、潘光旦が聞一多とともに文書委員に選ばれていることである⁽¹⁹⁾。

潘光旦は後に、

译者最初和靄理士的作品发生接触是民国九年，那时译者是20岁、正在清华学校高等科肄业。在清華当时就比较很丰富的藏书里，译者发見下靄氏的六大本《性心理学研究录》（Studies in the Psychology of Sex，当时全书共六冊，后来到民国十七年，靄氏又增辑下一本第七冊）。

と振り返る⁽²⁰⁾ように、心理学（生物学や優生学）に興味を持っていた。イギリスの性科学者、ハブロック・エリスの著作に早くも1920年の段階で触れていたことになる。彼は1922年、清華学校を卒業後、アメリカに留学し、ダートマス大学で生物学、動物学、古生物学を修め、さらにコロンビア大学大学院で、遺伝学、優生学の博士号を得て、1926年に帰国している⁽²¹⁾。1927年7月には、

『小青之分析』を出版する（聞一多がこの本の表紙を描いたことはよく知られている）。1929年8月に再販する時、『馮小青——一件影戀（同性戀慕）之研究』と題名を改めるが、内容自体は、1922年に初稿が出来上がり、24年に「婦

女雑誌」(商務印書館発行)に投稿した「馮小青」に訂正を加えたものであった⁽²²⁾。潘光旦は、西南聯合大学在職中の1941年12月には、ハプロック・エリスの‘Psychology of Sex: A Manual of Students’ (中国語訳名は、『性心理学』)を翻訳・出版している⁽²³⁾。

1927年5月、上海の呉淞政治大学に在職していた聞一多と上海の実家に住んでいた潘光旦は、聞一多咯血の病後静養のため杭州を訪れる。この時、二人は生物学、優生学について多いに論じたと言う⁽²⁴⁾。潘光旦は『小青之分析』を出版する直前であったし、聞一多の方も「『詩經』的性慾觀」を書いていた時であったから、互いの意見を交換する機会は多かったものと思われる。

なお、「清華男女同校期成委員会」の会則には、

(《清華男女同校期成委員會簡章》共六條)、目的爲“使清華男女同校于最近期間實現”。會員中的中堅分子稱責任會員，“責任會員須在實現清華男女同校上切實作事，并繳納定數的會費。責任會員及通常會員皆有到委員會及在委會中發言之權，但惟責會員有表決權”。

とある⁽²⁵⁾。この会は、北京女高師の自治会及び北京女界聯合会に書簡を出している。それによると、

男女同校風行全國，其爲當今要因勿庸贅言。乃弊校當局，于此問題目下絕少計議。要之原則昭昭，終難漠視，特實現之期，遲速有產耳。同人等迫瞻大局，自慚落伍，爰鳩同志，組織團體，以謀清華男女同校之迅速實現。

とある⁽²⁶⁾。ただ、聞一多はそれ以後、この運動には深く関与しなかった。と言うよりは、新たな動きが出てきた。すなわち、1921年11月20日、「清華文學社」が結成されたのである。11月25日の第一回常会では、「詩是什麼」が討論され、聞一多に詩の季節が訪れる。そして、12月2日の第二回常会において、聞一多は「詩的音節問題」を報告するわけである⁽²⁷⁾。

(4)

前述したように、周作人は比較的早い時期から男女問題・婦人問題に興味を示した作家である。1918年5月には、「新青年」第四卷第五号に与謝野晶子「貞操論」を翻訳したことを手始めとして、翌19年2月には、「毎週評論」第七期に、「中国小説里的男女問題」を書く。また、21年1月には、「新青年」第

八卷第五号に、「随想録（104）・舊約與戀愛詩」、「随想録（105）・野蠻民族的禮法」、「随想録（106）・個性的文學」を寄稿している⁽²⁸⁾。この中で特に、「野蠻民族的禮法」は、張菊香・張鉄栄『周作人年譜』が、

针对当时浙江省议会的一篇查弁第一师范男女共学的计划的议案，击了竭力主张男女隔离这类的野蛮民族的封建礼法。

と言う⁽²⁹⁾ように、男女共学問題について論じたものであった。1922年8月1日、周作人は、胡愈之、弟周建人等七人とともに婦人問題研究会を作り、「晨报」副鐫に「婦人問題研究會宣言」を發表する。さらに、10月5日には、エリスの「随想録」中の文明人に見られる「偽文明」と「偽道德」について述べ、1923年1月1日には、「婦女雜誌」第九卷第一号に「婦女運動與常識」を發表する。「婦人と社会」を巡る問題は「新青年」創刊以来の大きなテーマの一つであった。「新青年」を引き継いだ形の「新潮」にも婦人問題を論じたものが多い。例えば、葉紹鈞「女子人格問題」（第一卷第二号）、堺利彦「男女關係的進化」（第一卷第五号）、羅家倫「婦女解放」（第二卷第一号）等々がある⁽³⁰⁾。

また一方、潘光旦は、時代の寵児とも言うべきフロイトについて、

又过了一二年（1921，22年＝筆者），译者又有机会初次印弗洛伊德（Sigmund Freud）的精神分析论和此论所内含的性发育论发生接触。记当时读到的他的第一本书《精神分析导论》（A General Introduction），……。

と言っている⁽³¹⁾。エリスの本を読んで一、二年後にはフロイトの著作とも接触を持ったことになる。彼はそれを文章としては發表しなかったが、中国において比較的早い時期にフロイトに注目した一人ではある。聞一多とフロイトを巡って会話を交わしたかも知れないが、推測の域を出ない。

中国におけるフロイトを語る時、忘れられない人物に朱光潜がいる。彼は1921年7月に、「東方雜誌」第十八卷第十四号で「弗洛伊德的隱意識說與心理分析」と題するフロイト学説の紹介を行っている。それは、フロイトの前書きの部分の他、「一 隨意識說」、「二 隱意識與夢的心理學」、「三 隱意識與神話」、「四 隱意識與神經病」、「五 隱意識與文藝宗教」、「六 隱意識與教育」、「七 心理分析」、「八 心理分析與神經病治療學」、「結論」から成っている⁽³²⁾。ただ、聞一多が前述「附識」、「評本學年週刊里的新詩」を書いた時、こ

れを読むことはできなかった。時間がわずかにずれているからである。彼がそれを書いた時読んだのは、フロイトではなく、アルバート・モーテルの 'Erotic Motives in Literature' であった可能性が高い。モーテルが引用したものの中にもフロイトは出てくるわけであって、朱光潜によらずに書くことができたのである。この間の経緯については、別論で述べた⁽³³⁾ので、そちらを参照されたい。

(5)

聞一多の「『詩經』的性慾觀」そのものについては多くの研究があり、ここでは詳しくは触れないことにする。その替わり、聞一多の同時代人として『詩經』に論究した論文、評論を何例か挙げておく。一つは、雑誌「新潮」第一巻第四号に掲載された傅斯年の論文「宋末熹の詩經集傳和詩辨」であり⁽³⁴⁾、今一つは顧頡剛『古史辨』であり⁽³⁵⁾、さらにもう一つは、後年、聞一多が青島大学に在職した時に上司となる楊振声が1927年1月、雑誌「現代評論」「第二年増刊」に発表した論文「『詩經』里面的描寫」⁽³⁶⁾の三篇である。

傅斯年論文は題名にあるように、朱熹の『詩（經）集傳』『詩序』に対する一種の弁護であるとともに、朱熹の再評価である。ちなみに、この評論を載せたコラムの題名は「故事新評」であった。彼は、「新潮」創刊号では、宋・郭茂倩『樂府詩集』、清・梁玉繩『史記志疑』、英国・ジェボンス『科學原理』、第一期第四号では、前掲論文の他、「清代學問的門徑書幾種」として、江藩『漢學師承記』を始めとして、14種を挙げている⁽³⁷⁾。

楊振声は、傅斯年論文を評して、次のように言う。

前八年傅斯年先生在他的「宋朱熹詩經集傳和詩序議」一文中（「新潮」一卷四号）論及『詩經』的四種特色、一是眞實、二是朴素無飾、三是體裁簡當、四是音節自然。他說的很明透爽快、算是自有『詩經』以來第一篇老老實實論過『詩經』文學的文字。

と⁽³⁸⁾。確かに、傅斯年論文は『詩經』を經典として見ていない。その意味では、「五四」を経た、新しい解釈と言うことができるであろう。

顧頡剛の場合は、『詩經』を直接論じたわけではない。胡適が『詩經』『召南』『野有死麕』について、

你解「野有死麋」之卒章，大意自不錯，但你有兩個小不留意，容易引起人誤解：(1)

你解第二句，……。 (2)你下文又用「女子爲要得到性的滿足」字樣：

と言³⁹い、『肉蒲団』紛いの言葉遣いをしないように注意するとともに、

「野有死麋」一詩最有社會學上的意味。初民社會中，男子求婚于女子，往往漁取野獸，獻與女子。

と言⁴⁰ったことを伝えている。愈平伯と周作人はすでに「鄭箋」にも同様の記載があることを書いており、社会学的な観点から『詩經』を見ようとする試みがあったことを傍証している。

こうしたものに対して、楊振声論文は、『詩經』の「音韻」面に焦点を当てたもので、

我這一篇專從『詩經』描寫的方面上來說。本來要論『詩經』的文學，描寫與聲韻兩方面，都是重要的。只爲歷來論『詩經』聲韻的恨很多，已有專書可以幫忙，此處更不必贅及，故專論『詩經』的描寫。

と述べる⁴¹ように、『詩經』を音韻・描写の面から論じようとするものであった。彼には、1925年1月24日付けの「現代評論」第一卷第八期に発表した「禮教與藝術」という論文があり、

……人性有所需求，而禮壓迫束縛之，使其鬱而不伸，則性求成爲 Suppressed Wish 人性可壓而不可滅，所以紆余曲折、借藝術以表現之，心理分析學所謂 Sublimation 者，即此說也。詩三百篇（當限于「國風」）大抵皆男女相思悅之詞。若使人有感即發，有求心得，則亦如魚相忘于江湖耳、哪里來得掙扎、沒掙扎哪里又生出創造？

として、「Suppressed Wish」（抑圧された欲望）、「Sublimation」（潜在意識）等の心理学的術語を用いる⁴²が、『詩經』研究にその方法を用いてみようとは思わなかったわけである。

聞一多は、精神分析的な方法を用いて『詩經』を分析してみようとした。例えば、

『詩經』表現性慾的方式、可分五種。(1)明言性交、(2)隱喻性交、(3)暗示性交、(4)聯想性交、(5)象徵性交。

という部立て⁴³は、フロイトの 'Introduction Lectures on Psycho-analysis' (中

国語訳『精神分析引論』、日本語訳『精神分析入門』)の第十講「夢的象征作用」に、

……我曾举出三种关系：(1)以部分代替全体、(2)暗喻、(3)意象、我又说过还有第四种可能的关系，那时却未曾明确说出。这第四种关系就是刚才所说的象征的关系。

とある⁴⁴⁾分類と類似する。フロイトの『精神分析入門』は、1922年にロンドンで英文版が出版されているから、これを見た可能性を否定することはできない⁴⁵⁾が、私はアルバート・モートルの 'Erotic Motives in Literature' であった可能性が高いと考えている。

聞一多は、「『詩經』的性慾觀」の中で、

○謔字，我没有找到直接的證據，解作性交。但是我疑心這個字和 sadism, masochism 有点點關係。……。操觀全詩，尤其是 sadism、masochism 的好証例。

○前面講到這篇詩是研究 sadism 和 masochism 的好材料。

○這句詩，要用 masochism 的眼光看去，才對了。

等のように分析している⁴⁶⁾が、これらは彼が『冬夜評論』の中で、モートルに拠って芸術家の「自虐本能」を論じた時に用いたものをここでも使っている⁴⁷⁾からである。

(おわりに)

以上、「『詩經』的性慾觀」が書かれるまでの経緯を眺めてきたが、そこには個人を超えた、二十世紀という時代の流れに動かされている人間の姿が見え隠れする。学内の映画問題に端を発した、学生としての、或いは人間としての在り方を探っていた時、「性欲」と「殺人欲」とが人間を突き動かしているものだということに気づく。この考え方が「『詩經』的性慾觀」の主要テーマとなっているのである。それは、次の言葉に言い尽くされているであろう⁴⁸⁾。

『詩經』時代的生活，還沒有脱盡原始的蛾蛻殼。現在我还要肯定的一句，真正『詩經』時代的人只知道殺、淫。……『詩經』是一部淫詩，我們才能看到春秋時代的真面目。……原始時代本來就是那一会事。也不要提原始時代了，咱们这开化的二十世纪还不是一樣的？我們應該驚訝，倒是『詩經』

怎麼沒有更淫一點。

清華學校の男女共学運動は、途中で立ち消えになってしまいが、聞一多はそこから男女に関わる諸問題を認識していったのであろう。潘光旦との接近はそれをより深めていったものと思われる。

郭沫若は、1928年、日本に於いて『中國古代社會』を出版する。茅盾が「小説月報」第十六卷第一期に「中國神話研究」を書いたのは、それに先立つこと三年、1925年のことである。1921年、胡適、周作人、顧頡剛たちは、「民謡研究会」を組織する。この会は、現存する民歌を収集するものではあったが、中国文芸の特色として、古代との繋がりを色濃く残したものである点で、一種の文芸運動と考えられる。また、聞一多・朱湘たち「晨报副刊」「詩鐫」同人が民歌的作品を数多く詠むのも1926年のことである⁽⁴⁹⁾。新しい時代は、自らの古典を再評価する時代でもある。

聞一多の興味が詩歌を通じて古代に向かうのも時代の趨勢であった。古代の世界と自分の専門分野だと考えていた韻文の世界とが交錯するところに『詩經』があったのである。彼には将来、中国詩歌史を書こうとする遠大な目論見があった⁽⁵⁰⁾。この「『詩經』的性慾觀」は、その出発点であったのである。

(完)

注

- (1) 聞黎明・侯菊坤編『聞一多年譜長編』（湖北人民出版社 1994年7月以下、聞・侯『年譜長編』と略称する）p. 348 1.4~1.5。
- (2) 吳万鍾「試談聞一多先生『詩經的性慾觀』的思惟背景」（聞一多研究集刊）总第八輯 1997年1月）
- (3) 『聞一多全集』2（湖北人民出版社 1992年12月 以下、『全集』と略称する）、p. 44~1.41.7。
- (4) 『全集』2、p. 39、1.1~1.10。
- (5) 聞・侯『年譜長編』、p. 93、1.3~1.6。
- (6) 聞・侯『年譜長編』、p. 94、1.3~1.6。
- (7) 程季華主編『中国电影发展史』（中国电影出版社 1963年2月）第一卷、第一章及び麗苏元・胡菊彬『中国无声电影史』（中国電影社 1996年12月）第二章等の記事に拠る。
- (8) 聞・侯『年譜長編』、p. 109、1.21~p. 110、1.14。
- (9) 聞・侯『年譜長編』、p. 113、1.23~1.24。
- (10) 『全集』2、p. 26、1.5~1.6。

- (11) 『全集』2、p. 27～35。
- (12) 聞・侯『年譜長編』、p. 116、1.8～1.13。
- (13) 『全集』2、p. 35、1.19～1.23。
- (14) 聞・侯『年譜長編』の関連記事に拠る。
- (15) 聞・侯『年譜長編』、p. 132、1.22～1.24。
- (16) 聞黎明『聞一多傳』、p. 37、1.6～1.7。
- (17) 張菊香・張鉄榮『周作人年譜』(天津人民出版社 2000年4月)、p. 172。
- (18) 聞・侯『年譜長編』、p. 141、1.19～1.20。
- (19) 聞・侯『年譜長編』、p. 140、1.22～1.25。
- (20) 潘光旦訳注『性心理学』「譯序」(漢譯世界學術名著叢書 商務印書館 1997年4月) p. 2、2～1.6。
- (21) 『潘光旦文集』1 (北京大學出版社 1993年9月)、「編者前言」1.1～1.4。
- (22) 『潘光旦撰集』I「序言」(光明日報出版社 1999年8月)、p. 001～002。
- (23) 注20に同じ。
- (24) 王康『聞一多傳』(生活・讀書・新知三聯書店香港分店 1979年12月)第六章、p. 117、1.19～p. 118、1.6。
- (25) 聞・侯『年譜長編』、p. 141、1.2～1.6。
- (26) 聞・侯『年譜長編』、p. 141、1.8～1.11。
- (27) 聞・侯『年譜長編』、p. 147。
- (28) 注17に同じ。
- (29) 『周作人年譜』、p. 172、1.13～1.16。
- (30) いずれも『周作人年譜』に拠る。
- (31) 注20に同じ。
- (32) 『朱光潛全集』8、「弗洛伊德的隱意識說與心理分析」(安徽教育出版社 1993年2月)、p. 1～p. 11。
- (33) 拙論「聞一多『冬夜評論』に見える西洋文芸からの影響」(早稲田大學日本語研究教育センター「紀要」No. 13所収)、p. 90～p. 91。
- (34) 「新潮」は、上海書店刊影印版(1986年4月発行)、p. 691～699。
- (35) 『古史弁』三(上海古籍出版社 1982年8月)に拠る。
- (36) 中國近代期刊影印叢刊(岳麓書社 1999年11月)「現代評論」第二周年紀念增刊、p. 186～p. 194。
- (37) いずれも注36に拠る。
- (38) 注36同書、p. 187(下段) 1.12～1.17。
- (39) 前掲『古史弁』三、148、p. 442、1.4～1.6。
- (40) 同上、1.10～1.12。
- (41) 注36同書、p. 187、1.18(下段)～p. 188、1.3(上段)。
- (42) 「現代評論」第一卷第八期、p. 15、1.24～p. 16、1.2。
- (43) 『全集』3、p. 103、1.11～1.12。
- (44) 漢譯世界學術名著叢書所収、高覺敷譯『精神分析引論』(商務印書館 1997年2月) p. 113、1.1～1.1～1.4。
- (45) 吳萬鍾前掲論文(注2)は、この説を採用する。

- (46) いずれも『全集』3所収。それぞれ p. 173、1.16～1.21。p. 184、1.22～1.23。p. 185、110。
- (47) 前掲拙論（注30）参照。
- (48) 『全集』3、p. 190、1.4～1.5。
- (49) 拙論「『詩鐫』時代の朱湘の詩とその詩論」（早稲田大学日本語研究教育センター「講座 日本語教育」Vol. 34、p. 240、1.14～1.20参照。

本稿は、2000年11月26日、中央大学で行れた日本聞一多学会第二回秋季大会で発表した同題の草稿に手を加えたものであるとともに、2001年度早稲田大学特定課題研究2001A-176「中国現代詩人聞一多と雑詩「学文」をめぐって」の一環である。